

授業マネジメントの勘どころ： 話し方の勘どころ (3)

田邊 祐司 Tanabe Yuji
(専修大学)

1. はじめに

教員養成やその後の教員研修などで、教師の声の問題が正面から取り上げられることはあまりないようです。それは、声が on-the-job で身につくものと考えられているからでしょうか。今回は3人の熟練教師の「声」への覚醒、そして鍛え方を語ってもらいます。

2. 声への覚醒

声は「音声器官を動員して空気を振動させる」ことですが、non-verbal communication (非言語的コミュニケーション) という分野では、発話に伴う言葉以外の特徴を「パラ言語」と呼び、その中に声を位置づけています。つまり、ジェスチャーや顔の表情などと同じく、声がコミュニケーションに彩りをそえる重要な項目であると考えられているのです (Berko, Wolvin & Wolvin, 2009)。

教室という空間で行われる授業でもまったくその通りで、声は単に空気を振動させるだけでなく、授業に、そして、生徒の心に大きな影響を与えるパワーがあることに気づかされます (Karpf, 2008)。

熟練教師3人にとって、こうした声への覚醒は教壇に立ってから比較的早い段階で起きたそうです。

B先生の若き日(?)の回想です。

新任の頃は体育会系のノリでただ大声を張り上げていました。しかしこれはスタミナ勝負のところがあり、30代に入ると通じなくなっていました。そんなときベテランの先生の授業を参観する機会がありました。その先生の教室で声は力が抜けているというか、むしろおとなしい部類でしたが、先生は生徒の心へと見事に

切り込んでおられました。「がなる」のが専売特許だった私にはこれは新鮮でした。声量で押すだけよりも、引くときにはあっさりといいてみる。ポイントはそのさじ加減だということが分かるようになったのです。

C先生も同様の経験をしています。

初任1週間で選挙運動終盤の政治家のようになってしまいました。声がそうなるそこから疲れが全身に回ってしまうのです。そんな私を救ってくださったのが英語科主任でした。先生の授業では、伝えたいポイントでは声を張り上げるのではなく、逆に声を弱め、間をたくさんとられていたのが印象的でした。「押してもダメなら引いてごらん」というのは真実です。声への意識が芽生えてからは、自分なりに声の調音を意識するようになりました。その結果、授業のリズムががらっと変わりました。

コミュニケーションに彩りをそえる声を構成するのは、高低 (pitch)、強弱 (strength)、速度 (rate)、声質 (voice quality)、そして間の取り方 (pausing) です。それらを絵の具のように混ぜ、声を調音することで、メッセージという絵画が完成するのです。

3. 声の鍛え方

しかし、声の使い方は一朝一夕には身につくものではありません。彼らは何を意識して、どのように今ある声を獲得してきたのでしょうか。

A先生です。

「声に思いを」

音読のとき、我々は生徒に「気持ちを込めて！」

などと言いますが、教師自身がこれを実践していないと生徒はついてきません。そのため、授業中は、日本語でも英語でも、常に「誰が誰に」、「何の目的で」、「どんな状況で」、「どういう思いで」、「どんな場所（空間）で」、「どんな時間枠の中で」、などの点を踏まえながら、話すようにしています。こうした意識があると、自ずと声質がついてくるようになりました。

さらに A 先生は実習生にもひと言あるようです。

「草食声」

最近、普通に話す声で授業を行う実習生が増えてきました。圧倒的に声にパワーがないのです。生徒にはまるで子守歌です。こうした声は今に始まったことではないと思いますが、私は「草食声」と呼んでいます。そんな声の出し方では授業がうまくいかないのは当たり前です。

A 先生に同感した B 先生は、具体的な声の鍛え方を示してくれました。

「最後列の生徒の耳」

「クラスルーム声」というのは（田邊先生の）造語ですが、私の場合、実習生には初日にこれを伝えます。教室のサイズ、各クラスの生徒の特徴（ざわざわ型、おとなしい型、etc）に対応できる声を探させるのです。これは、臨機応変に声を調音できるようにするためです。

具体的には、初日の放課後に実習生を空いている教室につれて行き、「声出し」をさせます。そのとき意識させるのが、自分の声が最後列の生徒の耳に届いているのかどうかということです。教科を超えて実習生を集め、交代で最後列にすわらせ、「声の出し方」を鍛えます。ときには、各教科の実習指導担当の生方（せいほう）に集まってもらい、ワイワイ、ガヤガヤとやってもらうこともあります。

「お腹の底から声を出しなさい」ということはよく聞くセリフですが、いざ実践となるとやはり難しい。

C 先生です。

「アコーディオン」

実習生や新任の先生に「腹式呼吸」といってもなかなか伝わりません（声楽や演劇経験者は例外）。そこでまたまた（田邊先生の）小技ですが、「アコーディオン」という説明を使っています。これは息を増幅させるイメージを簡単に伝えることができます。喉だけで声を出さないように、横隔膜を意識しながら、空気を吸ったり（breathe in）吐いたり（breathe out）させて、お腹が膨らんだりへこんだりすることを体感させるのです。そのあとに、長音“ah”や「あいうえお」の訓練へと持ち込んでいます。そうしていると徐々に彼らの声に変化が出てくるのです。

4. おわりに

3 人とも期せずして声のパワーに気づいておられました。さほど声は「もの言う」のです。私自身の覚醒は大手の某予備校講師時代でした。授業内容もさることながら、声の使い方次第で受講者の数が左右されるという体験は痛烈でした（講師収入に直結！）。教室にチューターと呼ばれる授業チェッカーが複数入り、彼らが徹底的に私の声の使い方を指南してくれたのです。その内容はほとんどが、「パラ言語としての声」に集中していました。以来、落語はもとより文楽、歌舞伎、詩吟、さだまさしのステージトークなどを参考に、いろいろな手法で自らの声を鍛えています。

中学校の現場も事情は同じです。生徒の心へと切り込んで行くのはやはり声のパワーです。そういう意味において、話し方の勘どころではこれは外すことはできません。これからの先生方にはもっともっと声を磨いてほしいものです。

【参考文献】

- Karpf, Anne (著) 横山あゆみ (訳) (2008) 『「声」の秘密』草思社。
鴻上 尚史 (2013) 『発声と身体レッスンの魅力』魅力的な「こえ」と「からだ」をつくるために 増補新版 白水社。
Berko, R. M., Wolvin, A. D., & Wolvin, D. R. (2009) Communicating: A Social, Career, and Cultural Focus (11th Edition). Pearson.